



令和7年3月1日現在	
総世帯数	1,349世帯
総人口	2,330人
男	1,115人
女	1,215人

任意団体

常盤町町会
小穴 真一

「町会」については以前から不思議なことがあった。それは任意団体なのに①町内に町会が一つしかなく②世帯単位の加入が当然視され③行政の下請け仕事をしていることだ。このことに対して『町内会→コミュニティからみる日本近代』（ちくま新書）は参考になった。

とし、行政はこれを統治の技術として利用し、団体構成員も行政に協力することで臣民としての意義を自ら確認できた」とする。「町会は戦時下では戦争に協力し、敗戦によるマッカーサー元帥の町内会禁止令を経て復活し、時には行政への圧力団体にもなった。現在は加入者の高齢化や価値観の多様性による町会加入者の減少が進み、全国的に町会は弱体化の傾向にある」

著者 玉野和志氏は、都市型自治会をその機能に着目して『共同防衛』を目的とする『全戸加入原則』をもった地域住民組織」と定義する。玉野は「町会等の自治会は都市に流入して自営業者になった人々たちによる町の組織を発端



としている。

「町会」と聞くと真っ先に「ごみ集積所問題が頭に浮かぶ。」「ごみの収集・処分は行政、ごみ集積所の設置管理は町会」とする自治体は多い。町会未加入者の集積所利用拒否や、加入者同士のごみ当番等のトラブルがあるも、多くの自治体は任意団体の問題として対応に消極的だ。

防災の面では町会が存在しなくても避難所運営等が機能する国々があるのに、それらに学ばず、助け合いの名の下に町会をあてにする。今年2月の広報まつもと「町会のシンカ」は「社会の変化に応じて町会の在り方を変えよう」としている人たちがいる」とするが、町会に頼る統治手法こそ今や見直しが必要だ。

憧れのスイスアルプス

飯田町「丁目町会 大塚千代子

昨年夏、憧れのスイスアルプストレッキングに行ってきた。高齢の山仲間9名で、ツアーやガイドに頼るのではなく、勉強会とトレーニングを重ねた「オリジナルな旅」とはいえ、アナログな私は仲間

のサポートのお陰で無事に旅が出来た。スイスは観光立国で登山鉄道などの交通網が充実している。富士山よりも高い所までだれでも行くことが出来る。有名な「アイガー北壁」をホテルのテラスから見上げるグリーンデルワルド村で3日、槍ヶ岳の様に頂を天に突き上げていく「マッターホルン」の麓の美しい村ツェルマットに3日、毎日憧れの峰々を眺めて、下りはトレッキング。ホテルに戻り美味しいワインと料理を楽しむ。



ツェルマット村から見るマッターホルン

スイスの6月は山の中腹から里まで芽吹きと同時に、花々が咲きはじめ山すべてが花のジュータンに覆われる。感激!! 天国って、こんな所かしら?」

麓の村の教会や博物館、花畑の中の伝統的な家屋から、アルプスの少女ハイジが出て来きそうな「文化の道」も訪れた。次にフランスのリゾート地シャモニーに移動、ロープウェイでモンブラン山群の山々に抱かれる。こども雪の世界だ。

成田からスイスへの直行便はロシア上空を避ける為に北極上空を通過、14時間の長いフライト。12日間の中で一番大変な時間だった。最終ジュネーブの夜、ワインを傾け思う。年を重ねても「目標を持って向かえば夢は叶う」と。

第二地区全体 ケア会議を開催

令和7年2月6日から8日までの3日間で5回にわたり「令和6年度第二地区全体地域ケア会議」が58名の皆様の参加により開催されました。

本年度は「老いても、認知症になっても、自分らしく生きる」をテーマに2部構成で行われました。第一部は「映画を見て学ぶ」と題して認知症の患者を抱えた家族の日々を、娘である「私」の視点から描いたドキュメンタリー映画『ぼけますから、よろしくお願ひします』を上映しました。

認知症はどう進むのか、認知症を患う家族をどう支えていくのか、老々介護の現実といった誰にでも訪れる問題について考えさせられる作品



でした。参加者からは「年を取ることの大変さを感じた。夫婦でお互いを励まし支えあい、今も昔も変わらない二人の絆の深さや温かい家族愛に感銘を受けた」といった声が寄せられました。

第二部は「カードゲームで遊びながら学ぶ」と題して、もしもの時に自分が望む生活や医療を考え、家族や友人と話し合いを持ってもらうきっかけをつくるための「もしバナゲーム」を行いました。多くの人が大切とわかっていながらも避けている「人生の最期」について考えるカードゲームです。

「最期の時」のこと。「自分にとって大切にしたいことは何か」を本音で振り返り、交流し合う良い機会となりました。

今回の会議では「私達全員が思いやりの心を持ち、お互いを支え合えるような地域づくりの推進」の大切さを痛感しました。また、「自分がどう生きたいのか、信頼する人に伝えておく大切さ」を学びました。

今後「自分らしく老いる」をテーマに地区全体地域ケア会議を企画します。その際には、是非ご参加ください。

町会単独で避難訓練を実施 小池町町会

2月24日、小池町単独の防災訓練が実施され60人が参加しました。

町内の6か所に設定された一時集合場所のうち3か所をマンションの駐車場等にしてその住民に参加を呼びかけながら訓練の準備を進めたこととです。

一時集合場所での安否確認・避難者名簿作成訓練を経て町内の全体集合場所に移動し、町会全体で第二地区の指定避難場所である市民芸術館への経路を確認していただきました。

小池町町会として初めて市民芸術館で実施した避難訓練は、館内の避難生活スペース（生活スペース・更衣室・育児室ほか）を確認することか



参加者全員で避難生活スペースを確認



救命訓練で心臓マッサージを体験

ら始まり、市危機管理課職員による災害・防災講話、事業者からの災害時トイレ紹介、救護・搬送訓練、段ボールベッドの組み立て訓練に班ごとで取り組みました。

第二地区の指定避難所が市民芸術館であることは知っていても、そこへどのように避難していくのか、館内のどこに行けばよいのかまでは分からなかったという方も多く、「参加してよかった」という声が聞かれました。また、マンションの住人が何人も参加されたこと、すぐにでも役立つ救命訓練ができたこと等、小池町町会単独での実施に漕ぎつけるまで「役員は大変だったけれど、やってよかった」と手応えを感じる防災訓練になりました。

すすき川

平成10年4月に第二地区公民館・福祉ひろばが開館し、翌月の5月に「館報だいちく」第1号が発行され、この3月の第162号で27年を迎えます。年6回・奇数月の発行で、地域にお住いの皆様方の生活の中から生まれる話題や思いを取りあげてご寄稿いただいております。さらに公民館・福祉ひろばの行事・活動なども伝える記事、館報編集委員が行事・催し物に向けて取材し、内容を精査しながら感想も入れて執筆する記事もあります。

第二地区の館報は発行以来このスタイルを変えることなくその時々の人々の暮らしの息づかいが伝わる貴重な記事で紙面づくりがなされております。歴代の館報編集委員の皆様のご労苦にあらためて敬意を表し感謝申し上げます。最近では高齢化により地域行事への参加が叶わなくなったほかにも、役員のなり手がいないことなど大変な状況があります。館報編集委員の皆様におかれましては、連携して地域のためにご尽力されますようお願い申し上げます。
(早坂)